



司法試験合格者体験談

「情報戦を制するために」

塩見 恭平

私は、今回2度目の受験で最終合格することができました。2度の受験で感じたことは、司法試験においては情報と知識の連環が重要である、ということです。受験生は法科大学院を通じて知識の部分を日々鍛えているのですが、情報を甘く見ている印象を受けます。実力を上昇させる方法は努力です。それは間違いありません。実直に努力することで司法試験の壁を乗り越えることができる人は大丈夫です。しかし、私はそうではありませんでした。壁の高さを測らずにチャレンジすることがすごく怖かったのです。従って、方法論を練り上げ、司法試験に合格するためにはどのレベルに達すればいいかを考え抜きました。その上で、試験日に自分がそこに達するためにどのような勉強をすればいいか計画しました。実力は勉強量×勉強の質によって育まれるものです。そして、質を上げるのは自分に合った方法論の使用だと思います。数々の合格者がいろいろな方法論を言うと思いますが、個人にとって合わないという意味での間違いの方法論はあるが正解は唯一ではないと思います。私は、自分なりの方法論を見つけるまでに、合格者へアポをとって話を聞いたり、合格者ブログを読み込んだり、SNSで質問してみたり、予備校や学校主催のガイダンスへ出席し、そこでのお話を参考にしたりしました。その中で情報は自分にとって玉石混交でした。そこで、情報を自分の中で推敲し、自分なりの方法論として練り上げたのです。受験生の皆様も考える努力を怠らず、できる限りの努力を最高の質で行い合格してください。

「ある修了生の独白」

星野 大樹

私は修了後5年目という本当のラストチャンスで合格した者です。長い受験勉強を通じて大切だと思った事について幾つかお話しさせていただきます。まず、当然のことですが、論文試験の答えは日本語で書かなくてはいけません。限られた時間内に、読みやすく、かつ正確に伝わる日本語を書けるようにすることは大切なことです。こういった力を養うためには、実務家やビジネス文書を普段から書きなれている方に自分が書いたものを見てもらうほか、大野晋「日本語練習帳」(岩波新書、1999)、本田勝一「日本語の作文技術」(朝日新聞出版、1990)、阿部絃久「文章力の基本100題」(光文社、2010)といった本を読むのが良いと思います。次に、限られた時間内で相当の分量の論文答案を書くために、使いやすい筆記用具を選ぶことも重要な事です。私は自分の書きグセに合わせて調整してもらったペン先が細めの万年筆を使いました。短答式試験の対策としては、早い段階から肢別本などの問題集をやりましょう。その際、必ず判例六法や基本書に立ち返り、自分の知識を確認することを怠らないようにしてください。最後に判例の学習についてお話しします。判例百選は事案や判旨の要約が荒いので、中心的な教材としては余りお勧めできません。事案や判旨の流れを丁寧に解説している判例集(弘文堂「伊藤真の判例シリーズ」など)を使った方が良いでしょう。ジュリスト別冊の重要判例解説は過去4年分つづきました。近年の本試験の問題を見てみると、短答・論文共に重要判例解説掲載の新しい判例を素材としているものが見受けられます。判例の学習で注意すべきことは、あくまでも判例が採用している「考え方」が大切なのであって、判例を単にそのまま吐き出せば評価されるような問題は論文試験では出題されないとします。事案の特殊性や、判例の射程について常に意識した学習を行なってください。末尾になりますが、長丁場の受験生活ですから、健康面や生活のリズムなどには十分に注意なさって下さい。皆様のご健闘を心から応援させていただきます。

「成績下位の純粋未修者が合格するまで」

堀内 美希

- はじめに
私は、理系出身の純粋未修者です。ロースクールでは、勉強時間と成績が比例せず、悩んだ時期がありました。私の経験から、ロースクール生活などで注意すべき点をお話します。
- ロースクール生活で気を付けるべき点
司法試験の過去問をできるだけ早い時期に解いてみるべきだと思います。司法試験合格がゴールなら、今の自分とゴールとの最短距離は一本ハズです。その「ゴールに達するのに足りていないもの」を見つけることが司法試験の勉強だと思います。ゴールが見えているなら、ロースクールでの授業を司法試験に必要なものとして上手に活用できるはずです。
- 2回目受験にあたっての改善点
私は2回目で合格しましたが、以下の点を特に意識しました。

- (1)精神面
次回は絶対にどんなことをしてでも合格するとの気合いを入れる。
- (2)答案練習の重視
合否は答案でしか判断されません。論点に点数をふっている以上、2時間で試験委員が書いてほしい論点について書きさる必要があると思いました。日々の受験勉強時には、どんな体調でも書きさるようになることを目標にしていました。
- 4 最後に
受験生の中には、成績が思うようにならず、時には自分自身を信じることができなくなることもあるかと思います。私もそのような時期を過ごしましたが、「どうしても法律家になりたい」と思っていれば、最後には、合格というゴールにたどり着けると信じています。一番合格に必要なものは、自分の可能性を信じることだと確信しています。

「他学部・社会人からの司法試験」

岡 浩喜

- ・どんな勉強をすることが必要か
試験に受かるためには、試験に受かるのに「必要な能力」を身につけなければならないので、「現在の能力」と「必要な能力」の差を埋める勉強が「必要な勉強」です。そして、「現在の能力」は人それぞれで(一部の能力についてはもう伸ばす必要のない人もいるかもしれませんが)、同じ勉強をしても伸びる能力が異なる(記憶力に差があるなど)ので、「必要な勉強」も人それぞれです。法学部出身の若い人と同じ勉強をすればいいというわけにはいきません。まずは、各々自分にとって何が「必要な勉強」なのかを考えるのが良いと思います。
- ・私の勉強
1～2年次は、授業の復習と教科書の精読をとにかく反復して行いました。時間内に文章を書いたり、短答式問題を解いたりするのは得意だったので、しっかりとインプットをすることが「必要な勉強」だと考えてのことでした。他に「必要な勉強」があるかもしれないが、まずは基本的な学力を身につけた上でそれが何なのかを判断することにしました。
- 3年になったらアウトプットを増やそうかとも思っていたのですが、それなりの成績がとれていたし、その時点で法律の基礎的理解がまだ十分だとは思えなかったので、3年でも同様の勉強を続けました。
- ・最後に
私は、他学部出身のため基本的事項の理解を深めるためにインプット中心の勉強をしましたが、未だ完全に理解できていないことがたくさんあります。法学部出身の方も、基礎的事項のインプットを再評価されてみてはいかがでしょうか。

「私が合格できた理由」

飯田 亮真

- 1.はじめに
この度、私は司法試験に合格することができました。これも、先生方や友人達のお陰で、本当に感謝の気持ちで一杯です。ありがとうございます。3年間のロースクール生活を振り返って、私が合格できた理由として思うところを書きたいと思います。
2. 私が合格できた理由
(1) 先生を信じてついて行ったこと
一般論として、ロースクールの教育内容には、さまざまな意見・評価があります。しかし先生方も、何人司法試験に合格させたかで評価されるわけですから、司法試験に役立たない授業をされるはずがありません。とにかく、先生の授業について行くことだけを考えて勉強しました。
- (2) 自分の勉強法を貫いたこと
私は、自分の勉強法は変えませんでした。つまり、自分が勉強できるペースで勉強し、自分が最も理解できる教科書を読み続けました。「絶対に正しい勉強法」などありません。「自分に合った勉強法」こそが、合格への近道だと思います。
- (3) 腹を括って試験に臨めたこと
司法試験の8日前から、1日1科目、「最後の勉強」をしていきました。毎日、「よし、今日でこの科目は終わり!」と気持ちを区切っていきました。最終的に、「知らないことが出たら、開き直ってその場で考えよう」と、腹を括って試験に臨めたことが、私が実力(あるいはそれ以上)を発揮できた理由だと思います。
3. おわりに
司法試験に合格する秘訣は、「ピーキング」だと思います。ピーキングのためには、頭と心を高めていく必要があると思います。皆さんのベース・方法で、ピークを作って欲しいと思います。

発行元

大阪大学大学院高等司法研究科
発行：2012年11月15日

お問い合わせ

大阪大学大学院高等司法研究科
〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1 - 6
TEL：06-6850-5973
HPアドレス <http://www.lawschool.osaka-u.ac.jp/>



■ 大阪大学大学院高等司法研究科 ■



研究科長からのメッセージ

高等司法研究科長
谷口 勢津夫

高等司法研究科のニュースレター第10号は司法試験特集号です。

平成24年(第7回)司法試験の結果は9月11日(火)に発表されました。高等司法研究科からは177名が受験して74名が合格し、合格率は41.8%でした。この結果は、合格者数に関して過去最高の結果でした(これまでは平成22年の70名合格が最高)。また、合格率に関しても、受験者数が少なかった最初の2回(平成18年は21名、平成19年は73名)を別にすると、過去最高の結果でした。法科大学院別順位は合格者数で全国8位・関西2位、合格率で全国6位(予備試験合格者を含めると7位)・関西3位でした。なお、前号では、まだ発表前でしたので今年の合格者を含めずに、これまでの累積合格者数を263名(累積合格率51.7%)と報告しましたが、今年の合格者を含めると、修了生総数604名に対して337名が合格したことになります(累積合格率55.8%)。

今回の結果は、何よりも修了生一人ひとりの日々の研鑽、努力によるものであることはいくまでもありませんが、彼らが「仲間と一緒に合格しよう!」という強い気持ちを持ち続けた結果であるようにも見受けられます。自習室の近くで見かける彼らの表情や会話からは、真剣で張り詰めた雰囲気の中にも仲間を大切に作る気持ちの余裕のようなものが感じられました。「このような年は強いぞ。」と内心思っていました。結果が発表された今は、今年の結果に甘んじることなく、私たち教職員は学生にそのような良好な「研鑽の場」を提供するとともに、高等司法研究科の理念を体現した「良き法曹」を一人でも多く輩出できるよう、これまで以上に教育の質の向上に取り組んでいかなければならないと気を引き締めているところです。



平成24年司法試験合格者祝賀会



平成24年司法試験の結果について

平成24年の司法試験の結果について9月11日に発表されました。本研究科からは、177名が受験し、128名が短答式試験を突破し、最終的には74名が合格しました。全体の合格者数では全国第8位、最終合格率41.8%は全国第6位でした(表1、図1参照)。このうち、既修者に関しては64名のうち35名合格、合格率54.7%(50名以上受験したLSについて全国5位)。未修者については113名受験したうち39名合格、合格率34.5%(全国3位)でした(図2参照)。

【表1】H18年～24年司法試験関係データ

		H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24
受験予定者数 (A)	全国 OULS	2125 21	5280 87	7710 146	9564 197	10908 236	11686 210	11100 217
受験者数 (B)	全国 OULS	2091 21	4607 73	6261 127	7392 155	8163 180	8765 171	8387 177
受け控え率 ((A-B) / A%)	全国 OULS	1.6% 0.0%	12.7% 16.1%	18.8% 13.0%	22.7% 21.3%	25.2% 23.7%	25.0% 18.6%	24.4% 18.4%
短答合格者数 (C)	全国 OULS	1884 17	3479 54	4654 103	5055 110	5773 145	5654 125	5339 128
短答合格率 (C/B%)	全国 OULS	90.1% 81.0%	75.5% 74.0%	74.3% 81.1%	68.4% 71.0%	70.7% 80.6%	64.5% 73.1%	63.7% 72.3%
最終合格者数 (D)	全国 OULS	1009 10	1851 32	2065 49	2043 52	2074 70	2063 49	2102 74
短答合格者のうちの最終合格率 (D/C%)	全国 OULS	53.6% 58.8%	53.2% 59.3%	44.4% 47.6%	40.4% 47.3%	35.9% 48.3%	36.5% 39.2%	39.4% 57.8%
最終合格率 (D/B%)	全国 OULS	48.3% 47.6%	40.2% 43.8%	33.0% 38.6%	27.6% 33.5%	25.4% 38.9%	23.5% 28.7%	25.1% 41.8%
最終合格者数	全国順位	24	17	14	11	7	11	8
最終合格率	全国順位	26	13	13	11	8	14	6

【合格率・合格者数の全体的傾向と今年の特徴と課題】

昨年度は、合格率・合格者数とともに大きく後退させましたが、今年度については、以下の点で大きく前進しました。

まず、H22年度修了生で在学中の学内成績では十分合格できる力を持っていたにもかかわらず昨年度の試験では成果を出せなかった修了生が、2回目の試験で順調に結果を出すことができました。H23年度修了生についても、H21年度以前の修了生の司法試験結果と同様、学内成績順位に対応した合格実績が出ており、OULSの教育内容が法科大学院制度の理念・趣旨に合致したものであることが、司法試験の結果からも実証されました。

つぎに、対短答合格者の最終合格率の改善があります(表1中「短答合格者のうちの最終合格率」参照)。OULSでは、短答試験の合格率が他の有力LSに比して見劣りし、かつ、短答試験での点数も低く、論文試験で思うような結果が出せないときには最終合格に届かないということが課題とされてきました。今年度は、短答試験合格者の最終合格率が、昨年の39.2%から57.8%に大きく改善されました。上記課題と昨年の結果をふまえて、短答試験への修了生の意識が高まり、同時に、基本科目担当教員が論文力錬成を意識したFDとそれに基づく正課・課外での取り組み強化を行ったことによると思われます。

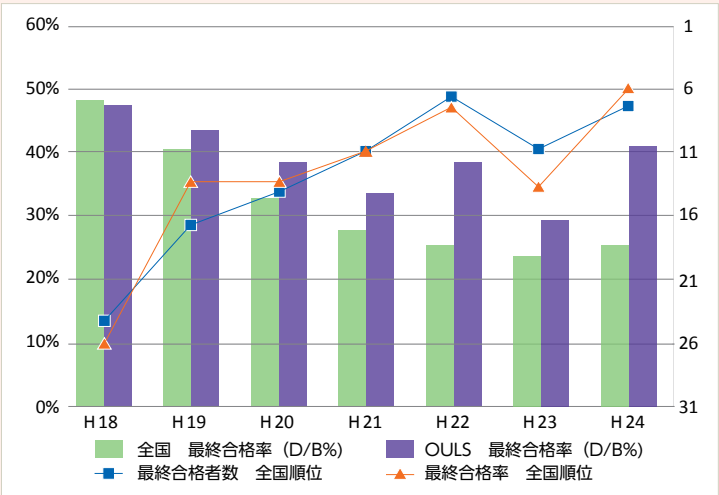
さらに、今年の顕著な特徴として、修了後直近の司法試験での1回目での合格率において、未修者修了生が、合格率を大きく伸ばしたことがあげられます。次の図3を見れば、H22年度まで30%台前半であったのが、今年度においては45.5%を記録しました。

以上の点は、昨年度と比べて特筆すべき点ですが、逆に課題も浮かび上がってきます。

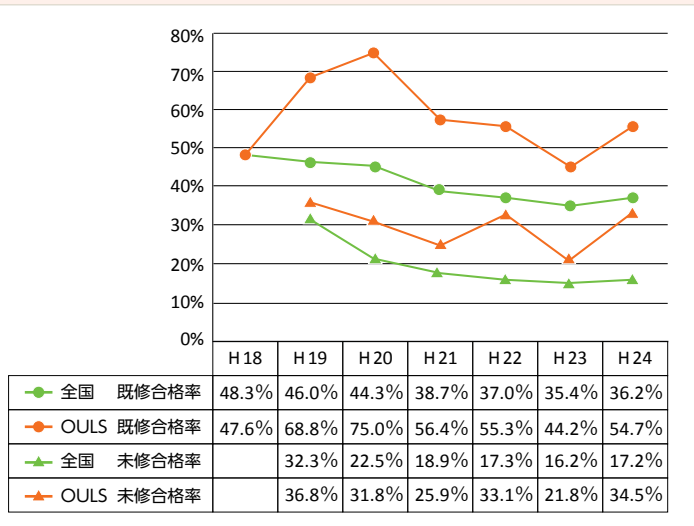
まず、長期的な傾向として、図1から明らかなように、合格者数・合格率が隔年で上下するいわゆる「隔年現象」の問題です。その原因については、慎重な分析と対策が不可欠です。この点に関連して注意すべきなのは、やはり修了後直近の試験での1回目合格率です。昨年度に比べれば改善されたとはいえ、図2からわかるように、同合格率は、既修者について長期的には下降傾向にあることが注意されるべきでしょう。前述したように、未修者については大幅に同合格率が上昇しましたが、既修者について昨年・今年のように40～50%台で推移し、不安定な上下を繰り返すこととなれば、いわゆる「隔年現象」から脱却することはできないでしょう。昨年のニューズレターの分析でも指摘されたように、既修入学者であっても入学時の学力が十分でないものが相当数存在する、という

副研究科長 三阪 佳弘

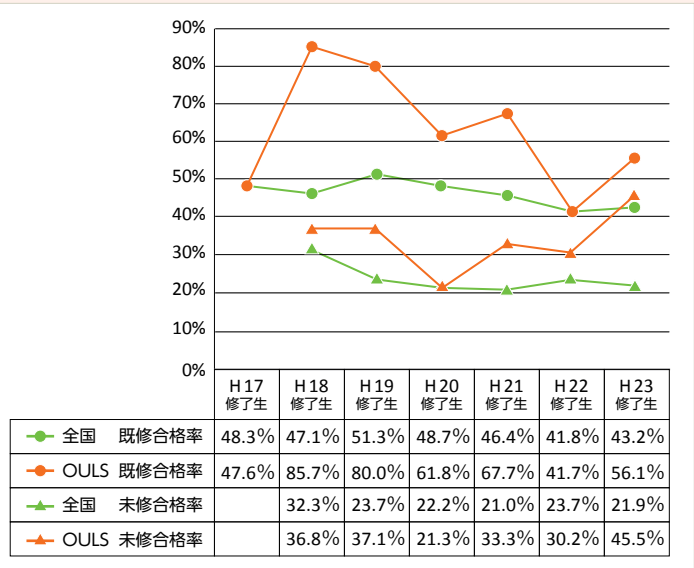
【図1】H18年～24年最終合格者数・率、全国順位の推移



【図2】試験年度別の既修・未修最終合格者・合格率の推移



【図3】修了後1回目での合格率 ※修了後の受け控えは除く



現実を直視する必要があります。一昨年から、スプリングスクールとして入学前準備教育の強化を図ってきましたが、たとえばこの面での既修新入生への手当を強めるなどの具体策が課題として残されています。

【累積合格率と修了生受験者への支援】

現制度では、修了後5年間、全3回の受験機会の間に司法試験合格が求められていますので、修了年度毎の修了者の累積合格率の推移も重要です。

【表2】既修者の修了年度別の累積合格率

	H17年度 修了生	H18年度 修了生	H19年度 修了生	H20年度 修了生	H21年度 修了生	H22年度 修了生	H23年度 修了生
未合格者	19.0%	0.0%	18.8%	20.0%	17.1%	34.2%	47.7%
H24試験合格者			0.0%	0.0%	5.7%	26.3%	52.3%
H23試験合格者		0.0%	0.0%	5.7%	17.1%	39.5%	
H22試験合格者	0.0%	0.0%	0.0%	14.3%	60.0%		
H21試験合格者	0.0%	0.0%	6.3%	60.0%			
H20試験合格者	11.8%	14.3%	75.0%				
H19試験合格者	23.8%	85.7%					
H18試験合格者	47.6%						
OULS累積合格者の割合	81.0%	100.0%	81.3%	80.0%	82.9%	65.8%	52.3%
全国累積合格者の割合	69.8%	64.7%	68.0%	70.4%	67.3%	57.0%	42.1%

表2は既修者の累積合格率です。修了後直近の1回目の試験でふるわなかったH22年度修了生については、2回目にあたる今年の試験で持ち直したことが読み取れますが、2回の試験で75%以上の合格を得ているH21年度以前の修了生と同等の累積合格を確保できるかどうか不安材料を残しています。この点はH23年度修了生についても同じです。未合格の修了生に対するサポートが依然として不可欠でしょう。

【表3】未修者の修了年度別の累積合格率

	H18年度 修了生	H19年度 修了生	H20年度 修了生	H21年度 修了生	H22年度 修了生	H23年度 修了生
未合格者	45.7%	46.8%	56.0%	52.2%	56.4%	60.8%
H24試験合格者		1.3%	1.2%	8.7%	20.0%	39.2%
H23試験合格者	0.0%	1.3%	3.6%	13.0%	23.6%	
H22試験合格者	2.9%	5.1%	23.8%	26.1%		
H21試験合格者	10.0%	12.7%	15.5%			
H20試験合格者	11.4%	32.9%				
H19試験合格者	30.0%					
OULS累積合格者の割合	54.3%	53.2%	44.0%	47.8%	43.6%	39.2%
全国累積合格者の割合	39.5%	36.3%	35.2%	36.0%	32.8%	20.6%

司法試験合格者体験談

本研究科では、学生委員会(学生のクラス代表で構成する組織)の企画・進行により、高等司法研究科後援基金及び大阪大学法学会の後援を得て、9月27日(木)午後5時から豊中総合学館4階401講義室において、司法試験合格体験報告会・合格まっちゃ会(待兼山茶話会)を開催しました。

このたびは、当日披露された司法試験合格者の体験談のうち、6名の体験談について、その概要をお届けします。



「良い仲間に出逢い、良い仲間になる」

中野 知美

1 勉強方法の選択

(1) 時期

法科大学院での生活においては、「いつ、何をやるか」が重要です。自分の能力、勉強の進み具合、試験との距離を考えながら、勉強方法を選択する必要があります。

たとえば論文に関して、私は、1年生の時は答案の書き方を覚えるために手書きの答練ゼミ(時間無制限、複雑でない問題)を、2年生の時は知識を蓄えるために討論型のゼミを(知識を多く問う複雑な問題)、3年生の時は試験を見据えて、現場思考力を磨くために、集まってその場で解く答練(時間制限有、試験的な問題)ゼミを主にやっていました。

(2) 性格

勉強方法は、自分の性格に合ったものを選ぶ必要があります。私は、1人で勉強をすることが苦手だったので、授業・ゼミを中心とした勉強

表3は未修者の累積合格率の推移です。前述したようにH23年度修了生については、修了後直近の司法試験での1回目での合格率が高かったことが特徴です。それは、過去の修了生が2回の受験で達成した累積合格率に匹敵するものであることが図から読み取れます。既修者に対して苦戦しがちな未修者の累積合格率がアップすることは、OULS全体の底上げにつながるのので、既修者と同様修了生に対するサポートが不可欠です。

【表4】未修・既修全体の修了年度別の累積合格率

	H17年度 修了生	H18年度 修了生	H19年度 修了生	H20年度 修了生	H21年度 修了生	H22年度 修了生	H23年度 修了生
未合格者	19.0%	41.6%	42.1%	45.4%	40.4%	47.3%	54.7%
H24試験合格者			1.1%	0.8%	7.7%	22.6%	45.3%
H23試験合格者		0.0%	1.1%	4.2%	14.4%	30.1%	
H22試験合格者	0.0%	2.6%	4.2%	21.0%	37.5%		
H21試験合格者	0.0%	9.1%	11.6%	28.6%			
H20試験合格者	9.5%	11.7%	40.0%				
H19試験合格者	23.8%	35.1%					
H18試験合格者	47.6%						
OULS累積合格者の割合	81.0%	58.4%	57.9%	54.6%	59.6%	52.7%	45.3%
全国累積合格者の割合	69.8%	49.9%	50.1%	50.7%	49.8%	43.8%	31.5%

表4は、既修者と未修者を合わせた全体の累積合格率の推移です。これまでの分析から明らかなように、H23年度修了生に関しては、昨年に比べて、既修者がやや持ち直し、それ以上に未修者の頑張りが顕著であったので、1回目の受験を終わった後の累積合格率は、既修者のみが修了したH17年度修了生を除いて、最高値を記録しました。5年3回の受験でのOULSの合格が、H17年度修了生を除いて60%を超えることが出来なかった従来の成績を超えることも展望できる結果といえるでしょう。

今回の試験結果は、昨年の結果を大きく上回るものであり、そのことは、未修者の成績の大きな伸長があったことによるものでした。しかし、子細に検討すると、未修者に対して、既修者の成績が伸び悩んでいる点に課題を残すものであり、これまでとは異なる傾向を見ることができます。こうした点に注意しながら、さらなる改善に努めていきたいと考えています。